

---

# 夜物語『絶』

†ユダ†

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜物語『絶』

### 【Nコード】

N7374S

### 【作者名】

十ユダ十

### 【あらすじ】

しとしと、しとしと

そんな音が似合うような小雨が降る夜。

主人公、黒灯蒼夜は不思議な少女 - 鳴瀬鈴と出会う。

彼女の放つ言葉は絶対的な道を示し相手をその道へ引きずり込

む力を持っていた。

迷い、信じ、非常識を受け入れる。

そして正しい道を見つけ出せ。

無知を自覚することで世界は変わる。

夜物語 - 始まります。

## Prologue (前書き)

まず始めに、作者は文才が微妙な為おかしな文があるかもしれませんが。もしあったら教えてください。

更新は頑張りますが遅めになります。なるべく沢山更新できるように頑張りますのでしおりやレビュー等お願いします。

それでは、本編へどうぞ。

## Prologue

しとんと、しとんと。

傘がいらぬ程度の小雨が降っている。

既に辺りは闇に包まれる虫の鳴き声すらしない静寂の世界へと変わってしまっていた。

何故真夜中、しかも傘がいらぬとは言え外出しているのか。それは現在の時間と自分の住んでいる場所が関係している。

現在時間は深夜1時30分、自分の家という物は無く友人の家に住まわせてもらっている。

こんな時間に友人が起きているはずも無く何もする事が無かった俺は、補導されるかもという危険性のある夜を散歩する事にしたのだ。

前文以外にも刺激のある人生の方が楽しい、という理由もある。

そんなわけで俺は友人の家から出ると小雨が降り注ぐ夜の道を歩いているわけだ。

それにしても辺りは暗い。

自分が歩いている道さえ数歩先がギリギリ見えるくらいだ。

明るい中を歩く普段とは違い、電灯や稀に道路を走り去る車のライトに僅かに照らされる闇の道を歩くのは何だか不思議な気分だ。

数分歩いていると十字路に到着した。

この十字路から伸びる道はそれぞれが交わる事無く別々の場所へと向かっている。

上手く言うのなら”運命の分岐点”という感じだろうか。少し大袈裟だが。

真っ直ぐ進めば高校へ、右へ進めば公園へ、左に進めば商店街に繋がっている。

いつもならば真っ直ぐ進み自分が通う高校へ進むのだが今は深夜、夜の世界。

迷った結果右に進む事にした。

暫く歩いていると小さな公園が見えてきた。この公園は遊具が滑り台とブランコだけという少し寂しい公園だ。

遊具の話をしたがこれはあくまでどれだけ公園が小さいかを表しただけであって自分が使用するわけでは無い。そもそも小雨とは言えぐっしりと濡れているだろう。

公園に入るとやはりと言っかなんというか、遊具は全て濡れていて使い物にならなかった。

ブランコが無事だったら良かったな、なんて心のどこかで思っていた。

仕方なく公園の隅にある2つのベンチの方へ歩く。

この公園のベンチは丁度良い感じに木の枝と葉が屋根になっていて雨が降ってもベンチが濡れないのだ。

ベンチの方へ歩いて行くと先程まで暗くて見えなかったがベンチにはどうやら先客がいるらしい。

こんな時間に外に出ている奴なんているのか？まあ俺は外に出ているんだが。

近づくに連れ段々と容姿がわかってきた。

黒くて長い髪に綺麗で透き通りそうな白い肌。

美しい……素直にそう思った。きっと初めての感情だろう。

これまで可愛いと思えるような女の子には何人が会ったが美しいと思った女の子には初めて出会っただろう。

背丈は……俺より少し低い、しかし同年代くらいだろう。

勿論話しかける事などせずに彼女がいない方のベンチに座る。

こんな時間に外にいるんだ、どうせまともな人じゃ無いだろう。  
などと思いながら目を閉じる。

小雨だが雨の音が小さく響いている。そんな中誰かが近づいて来て隣に座った気配を感じた。

まさかと思い目を開けると先程違うベンチに居た人が隣に座っていた。

「っ!？」

「座ってて」

彼女の声が公園に響く、すると慌てて立ち上がって彼女から離れようとしていた俺は見えない何かに貫かれたような感覚と小さな痛みと共にベンチから立ち上がれなくなった。

まるで自分がしようとしていた行動を何かでザクリと裂かれ強制的に止められてしまったような、そんな感じた。

「……………」

「あんた……一体……」

彼女は俺の上着の裾を掴んでこちらを見ている。その表情は無表情だけどどこか寂しげで――目を離せなくなった。

数秒間、見知らぬ人と見つめ合う。



自分の中ではたった数秒の出来事が10分、30分にも感じられた。

「……早く家に帰った方が良い」

彼女はそう言つと俺の服から手を離しベンチから立ち上がった。

「あつ、うん。わかつてるけど……ん？」

ここで何だか違和感を感じた。

それは微々たる物だったが確実に俺を貫いた。

気付くと無意識の内に立ち上がっていた、立とうなど微塵も思っていなかったのにだ。

それに心の奥深くで”早く帰らなければ”という思いがぐるぐる回っていた。

そして気付いた、この女は普通では無いのだと。

先程は”座つてて”と言われると立ち上がろうとしていた俺は意志に反してベンチに座ってしまった。

その時も見えない何かに貫かれた感覚があつた、痛みも感じた。

今回は”早く帰った方が良い”と言われると無意識の内に立ち上がり心の奥深くでは早く帰らなければと思つてしまっている。

実際には俺はまだこの人と居たいと思っていた、好意とかでは無く純粹にただ話がしたいと思っていたからだ。

「あの……つく!？」

ここに残ろう、この人と喋ろうと思っただけで全身を不快感に襲われる。

早く帰ろう、早く帰ろう、早く帰ろう。

頭の中でその言葉が何度も何度も繰り返される、下手すれば狂ってしまいそうな程に。

「……鳴瀬鈴」

「えっ……?」

「私の名前は鳴瀬鈴、また会えるから無理しないで帰った方が良いでしょう」

そう言っただけで彼女 - 鳴瀬鈴は俺がいない方のベンチへと移動しベンチに座った。

「あっ……わかった、またな」

「……」

彼女はこちらをチラッと見ると直ぐに視線を外し別の方を向いて

しまった。

俺は”また会える”と言った彼女の言葉を信じて家に戻る事にした。

これが俺、黒灯蒼夜と鳴瀬鈴が初めて出会った時であった。

## Episode 11

日差しがカーテンの隙間から部屋に差し込んでいる。

昨日、家に帰ると直ぐに寝てしまった。

結局あの人はなんだったんだろう、何故あんな時間に公園に？

でもまた会えそうな気がする。

コンコン

ノック音が部屋に響いたと思えば扉が開き誰かが入ってきた。

「おっす、起きてるな」

「竜……おはよう」

入ってきた人物は俺の幼なじみで同じクラスの友達だ。

名前は神崎竜二、みんなからは竜や神崎と呼ばれている。

俺を家に住まわせてくれていて結構良いやつだ。

「飯出来てるから直ぐ下りてこいよ」

「わかった、直ぐ行く」

竜は部屋から出て行った。

俺は時計を見る。

7時30分、まだまだ余裕がある。

俺が通っている学校、隈野田高校はなかなか校則が厳しく少しでも破れば直ぐに罰を喰らう。

罰には色々種類があり掃除から補習までめんどくさい物が沢山ある。

勿論、遅刻した場合も罰があるのだ。

とりあえずこのまま部屋に居たら遅刻する事になってしまうため学生服に着替えて一階へ降りる。

ここで俺が住んでいる友人 - - 竜の家を紹介しよう。

どこにでもあるような二階建ての一軒家で友人と俺の2人で住んでいる。

なんでも竜の両親はとある大企業の社長と社長秘書らしくかなりの金持ちらしい。

この家も竜が1人暮らしがしたいと言った時に買ったと聞いている。

因みに俺が竜の家に住んでいるのは中学生の時に両親を事故で無くし俺を引き取るような親戚も居ずに途方に暮れていた所に俺が

「俺の親が蒼夜が1人で生活出来るようになるまで……つまり就職するまで家で暮らして良いってよ。だから暮らせよ？拒否権は無いぞ？」

俺に言いほぼ強制的にここに住む事になったからである。

と、この家と俺が住むことになった理由の事はそろそろ止めようかな。

俺は一階に下りると竜が居るであろう居間へ向かった。

「遅いぞ、遅刻したらどうすんだ」

「悪い悪い」

竜は朝食を用意して待っていた。

俺は朝食が置かれた机の椅子に座る。

先に食べていても良かったと思うが口にはしない。

なぜなら以前俺が遅い時に聞くと「時間無くても1人で食べるよりも2人の方が楽しいだろ？」と言ってきたからだ。

その後、何度か同じような事があり同じ事を聞いたが毎回答えは同じ。

最近はもう面倒くさくて聞いてすらない。

「ほら、食べようぜ」

「はいはい……いただきます」

「いただきますーす」

朝からテンション高いな……全く。

こっちは昨日の夜の出来事で頭の中一杯だったのに。

あいつは一体なんだったんだ？夢……では無いはず、証拠に俺の濡れた服が部屋に掛けてあった。

まとも……じゃなかったよな？後、あの何かに貫かれたような感覚と痛み。

何か投げられたのか？違うのならば……もしかして声？

「そんなわけないよな……」

「ん？なにが？」

「あつ、わりい。なんでもない」

どうやら口に出してしまっただけらしい。

とりあえず考えるのは1人の時にしよう。

朝食を食べ終わるとバックを持って玄関へと向かう。

「遅いぞ」

「いつもと変わらないだろ？早く行かないと遅刻するぞ」

俺は竜に”遅いぞ”と言われた事に反論する。

そりゃ色々考えていたけど時間的にはいつもと同じだ。

俺と竜は家から出ると玄関の鍵を閉め歩道を歩き始める。

朝の道路は通勤する人の車や通学者達がいる。

多くも無く少なくとも無い、と言った人数だけれど。

「そう言えば蒼夜、今日転校生が来るらしいぜ。まだ男か女かわからずどのクラスに行くかもわからないけどな」

「へえ……転校生ねえ」

まさか……なあ。

うん、有り得ない。

幾ら転校してくるからって俺が誰だかわかってるはず無いしそもそも同じクラスになるなんて十分の一の確率だしな。

俺は転校生と聞いて昨日のあいつを思い出した。



確かに同年代くらいだと思ったけど流石に今日転入するのにクラスメイトの顔と名前が一致するけない。

きつと違うクラスで昨日”また会える”と言ったのも同じ学校だから偶然会つかもしれないって事だろ。

そう思って納得した、もしかしたら俺は彼女の事を心のどこかで恐れているのかもしれない。

一応言っておくが同じクラスになる確率が十分の一だといったのは俺が通う高校は一つの学年に十のクラスがあるからだ。

因みに学年は四学年あると言う珍しい高校だ。

「転校生、かなり楽しみだぜ」

「そーだな……」

朝からテンションの高い竜を軽くいなしながら学校へと歩いて行く。

現在高校一年、時期は梅雨。

普通ならばクラスに慣れて友達も数人出来ていそうだが僕には竜以外に友達と呼べる人はまだいなかった。

自分から話しかけず話しかけられてもすぐに会話が終わってしまう。

だから俺はあまり学校が好きでは無い、何故高校に行ったのかと  
考えてしまう程だ。

そもそも義務教育は終わったんだし仕事を始めれば良かったんじ  
や……と思うが時既に遅し。

何故かこの高校自分から退学が出来ない、本当に良くわからない  
学校だ。

そんなこんなしながら歩いている内に校門についた。

この高校の生徒が門に立っている先生へ次々と挨拶をしながら校  
舎へ入って行く。

「おはようございます!」

「おはよーございます……」

テンションの高い竜はともかく俺の声は周りよりも小さい。

すると先生が近づいてきた。

名前など覚えていない、覚える事すら面倒くさい。

「黒灯、声が小さいぞ!」

ああ……なんで朝からテンション高いやつが多いんだ。

こっちは寝不足でキツいつてのに。

まあ寝不足は自業自得なんだが。

てか何で名前覚えてんだよ。

「俺、朝は弱いんですよ」

「そんなもの理由にならんぞ。まあ今日は見逃してやろう、ホームルームに遅れないように教室に行きなさい」

「はい」

そう、いつもならば罰則があるのだが……何故か見逃してくれた。

俺は竜と一緒に急いで校舎へと走って行った。

## Episode 11 (後書き)

どうも、作者です。

最近忙しい為次の話は遅くなりそうです。

書き始めたばかりなのにすみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7374s/>

---

夜物語『絶』

2011年10月9日00時24分発行